

Floppy's Phonics Stage 5 'Uncle Max'

p.1

外でなにやら物音がしました。

古い車が一台止まると、バンという音がして、もくもくと煙が立ち上がりました。

p.2

へんてこな格好をした男の人が車から出てきました。長く伸びた白い髪、風になびく青いマント、それに大きな緑色の帽子をかぶっています。

p.3

その人は車の後ろから大きなスーツケースを取り出しました。

「あの人、誰？」ビフが聞きました。

「変わった靴だね」

p.4

「お父さんのおじさんだよ。マックスおじさんだ」お父さんが言いました。「会うのは子どもの時代以来だなあ」

「あの人、魔術師なの？」

p.5

「わしは、ペルーとかいろんなところに行っておった」おじさんは言いました。「だが、今帰ってきたのだ」

pp.6-7

「はじめまして」おじさんが子どもたちに言いました。「どうぞよろしく」

「一日か二日、ここに世話になってもよいかな？」おじさんは続けます。「迷惑はかけないよ」

「寝る場所はある？」

「あの…こちらこそよろしく」

p.8

「おじさんの荷物は多いなあ」お父さんが言いました。「雨がふりそうだから、全部中に入れた方がいいな」

「こっちこっち」

p.9

マックスおじさんはスーという名のオウムを飼っていました。

「この子はすごく恥ずかしがり屋でね」おじさんが言いました。

「それにすごく失礼ね」ビフが言いました。

「コノヒト、オバカサン！」

p.10

子どもたちはおじさんが気に入りました。おじさんは手品をしてくれました。

コインを消したのです。

「フィドルーデイドル!」

p.11

「きみたちのポケットをみてごらん」おじさんが言いました。

「どうだ！ キッパーが持っておる」

「どうやったんだろう？」

p.12

お母さんもおじさんが気に入りました。夕ご飯に大きなお鍋でシチューを作ってくれたのです。

「おいしそう」

p.13

「これはな、ドラゴンのしっぽとゴブリンのつま先が入っておるのだ」おじさんは言いました。

「コノヒト、ウソツイテル」

pp.14-15

マックスおじさんはお話をしてくれました。

「さあ、すわって。おじさんがヘビから脱出した話をしてやろう」おじさんは言いました。

「わしがペルーにいた時のことだ。巨大なヘビが木からするりと出てきおった。そしてわしの体に巻きついたのだ」おじさんは言いました。

「すごいや！」

「コノヒト、マタウソツイテル」

p.16

「しかしわしはヘビの歌を知っておったのだ

…だからその歌をうたった。低い声でな…

p.17

…するとヘビは体をほどいた。

そして地面に倒れこむと、そのまま眠ってしまったのだ」

p.18

「これはわしの作ったアイスクリームマシンだ」おじさんは言いました。

「物置小屋に置いてください」

p.19

「きみたちはどんなアイスクリームが好きかな？ 赤でもピンクでも青でもみどりでもできるぞ」

「茶色はどう？」

p.20

アイスクリームマシンはガタゴトと音を立てて動き始めました。

p.21

そしてピカッと光ったかと思うと、バーンという音をたてました。

アイスクリームマシンが爆発したのです。

「キャーッ！」

p.22

「あ～、物置小屋が…」お父さんが言いました。

「めちゃくちゃだわ！」

p.23

「そのう…熱々の黒いアイスクリームはいかがかな？」おじさんは言いました。

「まあとにかく、がんばったよね」

p.24

「もう行かなければ」おじさんは言いました。

「また泊めてもらいにくる。近いうちにな」

「楽しかったよ」